



文学の原像を求めて

奥野健男

31082

字の原像を求めて

奥野健男

潮出版社

文学の原像を求めて

昭和四十八年九月十五日 印刷
昭和四十八年九月二十五日 発行

定価 九八〇円

著者 奥野健男

発行者 島津矩久

発行所 株式会社潮出版社

東京都新宿区南元町二四一
電話東京(03)三五七―七二一
振替 東京 六一〇九〇

© 1973 T. Okuno Printed in Japan.

本文印刷／奥村印刷株式会社 製本 牧製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

文学の原像を求めて 目次

I 文学と風土

文学と風土 9

東北 * 深層日本の宝庫 14

東海 * 恵れた美しき人情と風景 35

甲信越 * 近代文学の源泉 49

奈良・紀州 * 歴史の故郷 63

京都 * 日本文学の舞台 72

阪神 * 錯綜する人脈地図 87

東京 * 巨大な文学の殿堂 101

II 作家と故郷

文学者の生家と故郷 141

坂口安吾 * 魂の原点・越後を訪ねて

III

文学の原像を求めて

室生犀星 * 遠き悲しき故郷・金沢 169

島尾敏雄 * 単独旅行者 194

井上光晴 * 辺境への旅 207

織田作之助 * 大阪の庶民の中で 219

チエーホフの遺蹟訪問 229

台所から入ったソビエトの魅力 234

チェコスロバキア・ポーランドのこと 243

日本的なもの、朝鮮的なもの 267

ヤポネシアの根っこで 280

あとがき 287

装幀
加山又造

文学の原像を求めて

I
文学と風土

文学と風土

日本の近代文学は、東京中心的で風土性が希薄だといわれている。たしかに文学者の大半、特に職業文学者のほとんど全員が、東京及びその周辺に居住し、文芸出版社も商業文芸雑誌も、ほとんど東京に集中している。文壇といえば東京を中心とする中央文壇だけで、ほかは関西文壇、九州文壇などがかろうじて認められるのみで第二軍的な同人雑誌のほかは、地方文壇はないといった方が正確であろう。

その地方地方の特有の文化、風土に根をおろし、一歩もそこを動くことのない文学者たちが割拠している外国の文学状況とは著しく異っている。そして日本文化の中央集権化、画一化はテレビ、週刊誌などのマスコミの発達、産業の工業化、人口の都市流入などによって、近時ますますはげしくなっている。しかし文学者や出版社の中央集中が、ただちに日本文学の画一化、風土性喪失につながるかといえば、必ずしもそうでもない。少くとも明治以来、今日までの文学を読む限り、そう簡単に結論を下すことはできない。ぼくはいつも日本の文学作品を読むたびに、その作家の生れ育った故郷の風土性や気質を強く感じてきた。

そして講演や取材旅行で、日本の各地を訪れる機会に恵まれるようになってから、東京に生れ育ったばかりには想像できないくらい、その地方地方の人が、その地方出身の文学者に、その地方を書いた文学作品に、強い関心をいだき、一喜一憂し、誇りに思い、また逆に憎しみに似た複雑な感情をいだいているのにぶつかり驚かされた。

そのひとつのあらわれとしては、全国いたるところに句碑、歌碑、詩碑、文学碑が建てられ、生家が記念館になり、文学者や作品の名を冠したマンジュウやヨウカンや手ぬぐいなどのみやげ物が売り出されていることだ。こういう郷党の期待や関心は、当然その地方の出身の文学者たちの意識にも強く反映する。それは地方出身のいなか者であるという東京に対するコンプレックスとも微妙に重なっている。ぼくは、ふだん同じ東京在住の文学仲間として交際している友人たちが、機にふれてはげしい愛憎の交錯した郷土意識を示すのに何度もぶつかった。郷土は文学者の恥部であり、アキレス腱であり、泣き所であり、そして文学の根源なのだ。

考えてみると、明治以来の名のある日本の文学者の大半は、東京以外の地方出身者である。その多くは地方の旧家、士族、あるいは没落旧家、没落士族の子弟であり、小学校、中学校（旧制）を、その故郷で過し、自我に文学にめざめ、大学を、文学者をめざし、郷党の期待を肩に笈を負って、あるいは反逆し石をもて追われるごとく、復讐を誓って上京し、いなか者と呼ばれる恥をしので苦学力行、あるいは放蕩放浪し、中央文壇に認められた人々である。この人々により日本の近代文学はささえられ、発展してきた。

彼らは文壇に登場して以来、東京に居を定め、指導的文化人、知識人として中央で活躍する。

しかし魂の底には、たえず幼少年期を過した故郷の原風景を秘めていた。郷党の期待と呪詛（じゆそ）をいつも肩に背負っていた。少年期に訣別したゆえに、故郷の風土はかえって純化理想化され、郷党の血や気質は都会の中でかえって強く自意識化し、宿命化する。故郷の風土と血は彼の文学のパン種に詩のふるさとに、愛憎のるつぼになる。東京人として、いや国際的文化人としてふるまえばふるまうほど、隠した風土の色は逆にあらわれてくる。ぼくは東京中心、中央集中といわれる日本文学に、意外に強く風土性が見られるのは、以上のような理由によるのではないかと考えた。今度、筑摩書房刊の「現代日本文学大系」の付録として、四百枚の「現代文学風土記」を書いたのも、そういうぼくの仮説を実際の作品、文学者に即して験（た）めてみたかったためである。短い期間の仕事であったため、十分に調べることはできなかったが、ぼくの予想していた以上に文学や文学者と、その風土の関係は強いものがあつた。

特に興味深かったのは、故郷の風土や気候を憎んだり、無関心さを装ったりしている文学者たちがそういう姿勢を示すことによって無意識にその郷土の共通した気質を示していることである。郷土を憎んでいる文学者の、その憎み方がいかにも郷土的なことである。東北地方、九州地方という大きな区別もできるとともに、府県より昔の国、いや藩によって気質や考え方が違う。これは徳川三百年間、藩ごとに閉鎖的な独立国をつくっていたためだろう。そういう藩ごとの違いを調査し、記録しうるのは、もう今日をおいてないのではないだろうか。その意味で今日の学者や文学者は、今や画一化し消えつつある国気質、藩気質を調べ、書き残して置く責務があると思える。

県ごとに見ても秋田、宮城、栃木、埼玉、山梨、富山、奈良、鳥取、徳島、佐賀、宮崎、鹿児島など、そして名古屋のような余り文学者を生ない県や都会もあれば、北海道、青森、岩手、群馬、神奈川、長野、石川、兵庫、広島、愛媛、高知、福岡、長崎、熊本そして東京、大阪、横浜、神戸と多くの文学者を生んだ県や都会もある。政治家、経済人、軍人、科学者、美術家などの地図と比較してみると、徳川三百年間の治世、経済的な貧富、そして自然、風土とのおもしろい関係が出てくる。

近代俳句が愛媛県から、近代短歌が長野県から、近代詩が群馬県と福岡県から、小説が石川県、岡山県、大阪府から、国民詩人が岩手県から、思想家が熊本県、高知県から、大衆文学が横浜市から、文芸評論家が東京の山手からというように、それぞれ群をなして輩出しているのも興味深い。風土性のないように見える阪神、東京も詳細にみると、時代とともに移る微妙な風土が文学者に大きな影響を与えている。

時間軸だけの縦割りの文学史だけでは、東京を中心とするジャーナリスティックな文学思潮と流行しかとらえられないが、一見遊び的な文学者の郷土別人国記が、今までの文学史が見のがしていた郷土的人間関係や風土性によって、日本文学の性格を新しい角度からの照明によって浮き彫りする可能性があるのでないか。その作品と、自然の風景や人情やフォークロア（民話）や伝統、そして遺伝的気質の関係を、ぼくはこれからもゆっくりたのしみながら調べてみたいと思う。

たとえば、東大仏文出の秀才大江健三郎の文学、そして「万延元年のフットボール」は、もっ

とも現代的、インターナショナル的であると同時に、子規、虚子など書生っぱの近代俳人を生み、熱血の政治小説を軍事小説を生み、ダダリスト新吉を生み、そして八つの小藩にわかれ、農民一揆の多かった伊予（愛媛）の、山中にある小さな部落の旧家に生れた彼にしか書けない文学であることを、じっくり考察する必要があるように思えるのだ。

東北＊深層日本の宝庫

東北地方は日本全土の五分の一を占める広大な地域でありながら、古来「みちのく」、「えぞのく」などと呼ばれ、都から遠く離れた北辺の未開の地とされてきた。（江戸時代までの日本地図を見ると、東北地方は実際の大きさより二分の一、三分の一に縮められ、ゆがめられて描かれている。）とりが鳴くような言葉を話すあずまよりもっと遠い、能の「黒塚」に語われた安達が原の鬼婆や、厨子王や安寿姫をさらった山椒大夫などが棲むおそろしい土地、しのぶ文字摺りなどのかなしくすさまじい土地であり、芭蕉の「奥の細道」の心細い旅の感傷の地であった。平泉の藤原三代の栄華とか仙台の伊達政宗の海外雄飛とか、例外的な文化が存在したことがあったにせよ、中央の政治や文化に影響を与えるような力はなく、辺鄙な異境としても珍しく描かれ、歌われる文学の対象にしか過ぎなかった。そして東北の人々自身も、遠く都の分化に憧れ、都を追われ、この地におちのびてさまよう貴人を尊び、あやかり、たとえば一連の「義経記」の伝説をつくりあげるような、文化はつる後進地方として甘んじてきた。

しかしこの雪深く、飢饉のあいづく、厳しく烈しい自然と風土を耐え忍んでいる東北の人々は、